

上総国分寺の創建瓦に関する考察

かずさのくに国府探検会
高橋 邦明

2026年4月

目次

はじめに 瓦とは

第1章 瓦の伝来と歴史

1. 1 瓦の起源（中国から朝鮮へ）
1. 2 日本への伝来と普及
1. 3 上総国への伝来と普及
1. 4 まとめ

第2章 国分寺建立の経緯

2. 1 国分寺建立の背景
2. 2 国分寺建立の詔
2. 3 国分寺の造営
2. 4 上総国分寺の造営
2. 5 在地郡司の関与について
2. 6 上総国分寺の完成
2. 7 まとめ

第3章 上総国分寺の瓦

3. 1 上総国分寺に使われた瓦の数
3. 2 上総国分寺の創建瓦文様
3. 3 まとめ

第4章 古代瓦の製造方法と瓦窯

4. 1 古代瓦の製造方法
4. 2 上総国分寺の瓦を焼いた瓦窯
4. 3 まとめ

あとがき

はじめに

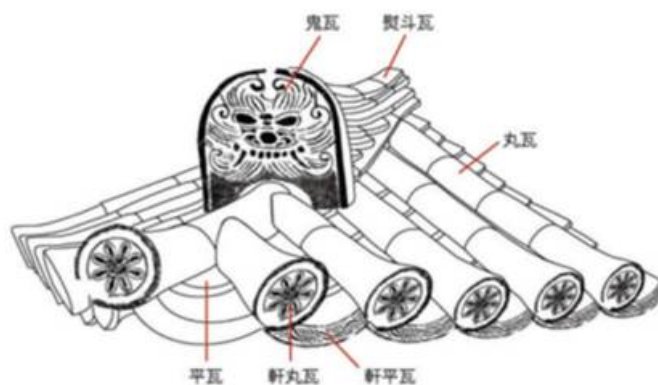
上総国分寺跡は、市原市が古代上総国の政治、文化の中心地であったことを象徴する歴史的文化遺産であり、長年の発掘調査から、広大な寺院地や伽藍等が明らかになる一方、大量に発掘された瓦から、国分寺が瓦葺の荘厳な佇まいであったことを想像することができる。

本論文では、瓦の伝来と広がり、そして上総国分寺の創建時に使われた瓦について考察する。

・瓦とは

瓦とは、粘土を一定の形に作り、瓦窯で焼いたもので、主に屋根を葺く材料として使われる。屋根瓦の葺き方には本瓦葺きと棧瓦葺き（さんがわらぶき）とがあり、瓦は、形状や使用場所によって平瓦・丸瓦・鬼瓦・棧瓦・軒瓦などと呼ばれている。

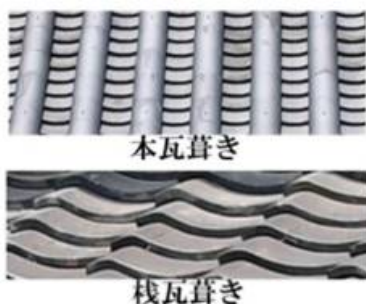
瓦の名称



引用 旭山町役場「旭山窯跡群」

本瓦葺き：平瓦と平瓦を並べ、その間を丸瓦で覆う方法であり、古代瓦の葺き方である。

棧瓦葺き：丸瓦と平瓦が一体化したもので、軽量で安価な瓦として江戸時代に開発された。



第1章 瓦の伝来と歴史

本章では、瓦の起源と瓦が日本や上総国に伝来した経緯について述べるが、瓦は、元来仏教寺院の建築技術として伝わり、当初は寺院にのみ使われていた。よって、仏教や古代寺院の広がりについて言及しながら、瓦の普及について考察する。

1.1 瓦の起源（中国から朝鮮へ）

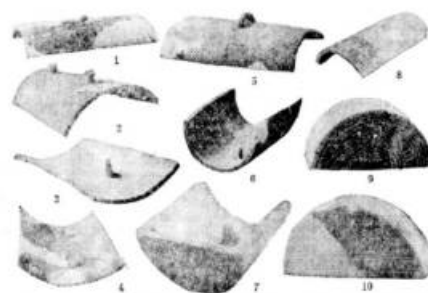
瓦とは、粘土を一定の形に作り、瓦窯で焼いたもので、主に屋根を葺く材料として使われるが、その起源については諸説ある。

一説によれば、世界で最も古い瓦は、中国の陝西省西安近郊の古代宮殿遺跡で発見されたおよそ3000年前の西周時代初期の平瓦であったと言われている。その後、丸瓦と平瓦の組み合わせとなり、西周時代末には丸瓦の先端に文様をつけた半円形の「瓦当」がとりつけられるようになった。

1.1 西周の最古の瓦



引用) 中国における最古級の瓦とその分布について 奈良県立橿原考古学研究所



1～5・8:平瓦 6:椽瓦 7・9・10:軒丸瓦 (陝西周原考古隊1981)

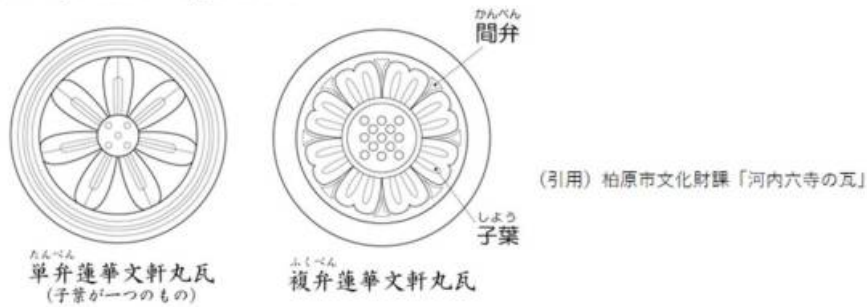
図10 周原遺跡召陳建築址出土瓦

漢代になると瓦当は現在見られるような円形になり、様々な文様が生まれる中、仏教美術の装飾として蓮華文（蓮の花の模様）が用いられるようになる。

漢の瓦は、西暦前108年、楽浪郡の設置とともに朝鮮半島に伝わり、その後、高句麗、百濟、新羅の三国時代になると、各国の文化的背景や仏教の受容に伴って独自の発展を遂げた。

その中で、中国南朝の影響を受けた百濟では、単弁蓮華文が用いられ、簡素ながらも格調高い蓮華文が流行した。

1. 1 単弁蓮華文と複弁蓮華文



1. 2 日本への伝来と普及

1. 2. 1 仏教の伝来と普及

仏教は、6世紀中ごろ百済から伝わったとされている（538年説と552年説が有る）。

* 552年説：『日本書紀』に欽明天皇13年（552年）に百済の聖明王が使者を送ったとある。

* 538年説：『元興寺縁起』や『上宮聖徳法王帝説』などの記述に基づく。

1. 2. 1 仏教の伝来ルート



仏教は、当時の朝廷に衝撃を与え、「仏教の是非」を巡って賛成派の蘇我氏と、排仏を主張する物部氏との間で対立が起こったが、蘇我氏が物部氏を滅ぼしたことで決着した。

その後、蘇我氏や聖徳太子が中心となって、仏教の受容を積極的に推し進め、飛鳥寺、四天王寺や法隆寺の建立を行う一方、594年に「三宝興隆の詔」を発して仏教の信仰を促すと、仏教は全国に広まり、地方の有力豪族たちも畿内に倣って寺院造りに励むことになる。

それまでの大型古墳の築造に代わり、寺院の造営が権威の象徴となっていくのである。

624年には、全国に46の寺ができ、更に692年の時点では、545の寺があったと伝えられている。

1. 2. 2 仏教による技術的な影響

仏教と共に伝わった寺院建築や仏像彫刻等の技術が、日本の建築・文化に大きな影響を与えた。特に、建築技術では法隆寺に代表される耐震性を考慮した木造建築技術が飛躍的に進化し、瓦葺の屋根による耐久性を備えた寺院が建てられていく。

1. 2. 3 瓦の日本への伝来と普及

日本書紀には、588年に百済から僧や工人たちとともに、4人の「瓦博士」が渡来し、飛鳥寺（創建596年、創建寺名 法興寺）の建立に携わったとの記述がある。

『崇俊天皇元年(588年)、百済国より瓦工四人渡来す……。瓦窯作工、生瓦作工、瓦焼き作工、瓦葺き工四名の瓦博士である……。』

1. 2. 3 百済の寺院と飛鳥寺の軒丸瓦比較



また、飛鳥寺の建立の過程で、日本人の工人集団が「瓦博士」から指導を受けて技術を習得し、その後、多くの寺院造営に関わっていったと思われる。またその過程で、製造方法の改善を行い、生産性を高める一方、瓦の文様についても工夫が凝らされ、各種文様が生み出された。

1. 3 上総国への伝来と普及

上総国への瓦の伝来や普及についても、古代寺院の動きと重なるため、仏教や寺院の広がり合わせて瓦について考察していきたい。

1. 3. 1 上総国への仏教の伝来

7世紀に入ると各地の豪族たちは競って寺院を建てていくが、上総国でも仏教が伝来し、7世紀後半から寺院が建てられていった。

上総国では大寺廃寺（木更津市）が最も古い本格的な寺であったと考えられている（670年頃の創建）。その軒丸瓦は奈良県明日香村の川原寺の文様の流れをくんでおり、塔の存在を表す石製露盤（千葉県指定有形文化財）が発見されている。

造営したのは、小櫃川流域で大型古墳を作り続けた馬來田の系譜を汲む在地豪族と思われる。

1. 3. 1 上総大寺廃寺軒丸瓦



(引用)
木更津市郷土博物館



1. 3. 2 上総国内への普及

上総国では、7世紀後半には7寺、国分寺建立以前には、14の寺が建てられていた。

7世紀に創建されたとされる寺は、今富廃寺、二日市場廃寺、真行寺廃寺、光善寺廃寺、九十九坊廃寺、上総大寺廃寺、岩熊廃寺である。

仏教はまず旧国造の系譜をひく有力郡司たちに受容され、古墳に代わる権威の象徴として寺院が建立された。また、これらの寺の瓦文様は畿内の官寺の文様を取り入れており、上総国が古墳時代から畿内の影響を強く受けていたことが伺える。

このように、上総国では、国分寺建立以前に複数の寺院造営の積み重ねがあり、国分寺の建立を支える技術的基盤はすでに在地社会にある程度存在していたと思われるが、建立に

■須田 勉「ならび建つ国分僧寺・尼寺 上総国分寺」 新泉社 (2220/9/20)

■「瓦の基礎知識」(株)鶴弥 <https://hitotsuchi.media/tile-history/>

■「発掘いちはらの遺跡」市原市埋蔵文化財調査センター (2010/3/3)

■花谷 浩「飛鳥の瓦と百済の瓦」 (出雲市文化企画部) (2010/11/30)

file:///C:/Users/uq026/Downloads/BB04047812_121_133%20(9).pdf

第2章 国分寺建立の経緯

本章では、国分寺がどのような経緯で建立されるに至ったかについて確認し、この国家的プロジェクトがどのように遂行されていったかを述べたい。

また、上総国分僧寺・国分尼寺についてもその完成に至る経緯を確認しつつ、文字瓦や墨書土器等の出土品から在地豪族の関与についても考察する。

2. 1 国分寺建立の背景

国分寺建立の最大の契機は730年代に起こった天然痘の流行である。北九州から発した天然痘は猛烈な勢いで全国に広まり、庶民だけでなく国家の中枢を担う貴族までもが命を落とし、人口の三分の一を失ったとされている。こうした疫病と飢饉が続く中で、大宰府にて藤原広嗣の乱(740年)が起こり、社会不安が広がった。

これらの社会不安に対し、聖武天皇は自身の力不足を反省し、仏教の力を借りることで、疫病の蔓延を抑え込み、国家の平和と安寧を実現しようとした。

国分寺のモデルとなった制度は、唐の時代、則天武后が全国諸州に作らせた「大雲寺」とされているが、僧寺と尼寺の二寺建立については、聖武天皇の仏教へのあつい信仰と光明皇后の強い意志があったと言われている。

(参考)則天武后と大雲寺

則天武后は、低い身分ながら後宮に入り、高宗の皇后となって、実権を握り、高宗の死後、690年、初の女性皇帝として即位した。
そして、女性の即位を正当化する経典『大雲経』を流布させるため、自身の顔に似せた毘盧舎那仏の大仏を洛陽の竜門に作らせる一方、全国の州に「大雲寺」を建立させた。

2. 2 「国分寺建立の詔」

741年、聖武天皇は「国分寺建立の詔」を発し、国毎に金光明四天王護国之寺(国分僧寺)と「法華滅罪之寺(国分尼寺)の建立を命じた。

その内容は、各国に七重塔を建て、『金光明最勝王経(金光明経)』と『妙法蓮華経(法華経)』を写経すること、自らも金字の『金光明最勝王経』を写し、塔ごとに納めること、国毎に国分僧寺と国分尼寺を1つずつ設置し、僧寺の名は金光明四天王護国之寺、尼寺の名は法華滅罪之寺とすること、僧寺には僧20人、尼寺には尼僧10人を置くこと、僧尼は毎月最勝王経を転読する等である。

国分寺建立の詔

『続日本紀』天平十三年三月乙巳の条……
○乙巳、詔曰、朕以薄徳、忝承重任。未弘政化、寤寐多慙。古之明主、皆能光業、国泰人樂、災除福至。脩何政化、能臻此道。頃者、年穀不豐、疫癘頻至。慙懼交集、唯勞罪己。是以、広為蒼生、遍求景福。故前年、馳使增飾天下神宮。去歲、普令天下造、釈迦牟尼仏尊像、高一丈六尺者、各一鋪、并写大般若經各一部。自今春已來、至于秋稼、風雨順序、五穀豐穰。此乃、微誠啓願、靈呪如答。載惶載懼、無以自寧。案經云、若有国土講宣誦、恭敬供養、流通此經王者、我等四王、常來擁護。一切災障、皆使消殄。憂愁疾疫、亦令除差。所願遂心、恒生歡喜者、宜令天下諸国各令、敬造七重塔一区、并写金光明最勝王經、妙法蓮華經一部。朕、又別擬、写金字金光明最勝王經、每塔各令置一部。所冀、聖法之盛、与天地而水流、擁護之恩、被幽明而恒滿。其造塔之寺、兼為國華。必択好処、実可久長。近人則不欲、薰臭所及、遠人則不欲、勞衆集。国司等、各宜務存嚴飾、兼尽潔清。近感諸天、庶幾臨護。布告遐邇、令知朕意。又每国僧寺、施封五十戸、水田一十町。尼寺水田十町。僧寺必令有廿僧。其寺名為金光明四天王護国之寺。尼寺一十尼。其名為法華滅罪之寺。兩寺相去、宜受教戒。若有闕者、即須補滿。其僧尼、毎月八日、必心転誦最勝王經。毎至月半、誦戒羯磨。毎月六齋日、公私不得漁獵殺生。国司等宜恒加檢校。

出典『続日本紀』新日本古典文学大系13

2. 3 国分寺の造営

地方にとって国分寺は未曾有の巨大寺院であり、その建築にかかる瓦、木材、金属等の資材は膨大であり、建設人員や技術者の確保も困難を極めた。そのため負担を嫌った国司の怠慢や力不足もあり造営事業は滞った。

747年、朝廷は「国分寺造営督促の詔」を発し、郡司や在地豪族に本事業への協力を求めた。つまり、諸国の郡司に対し3年以内に国分寺の塔、金堂、僧房を造営すれば、郡司の世襲を認めると確約したのである。この詔によって、国分寺の造営が一斉に進展することになった。

各地の国分寺がいつ完成したかについての記録はないが、当時の朝廷の法令などを考慮し、おそらく聖武太上天皇の一周忌法要（757年）から光明皇太后の一周忌法要（761年）の間には完成していたものと思われる。

2. 4 上総国分寺の造営

741年に発布された「国分寺建立の詔」では、七重塔を持つ立派な伽藍の造営が命じられていたが、上総国では、当初掘立柱建物による比較的簡単な伽藍で間に合わせたことが発掘調査で確認されている。この段階をA期と呼んでいる。ただ、その面積は平城京の大官大寺に匹敵する規模で計画されており、その後の造営もこの規模を踏襲している。

A期の上総国分寺の造営は、藤原朝臣宿奈麻呂（ふじわらあそんすくなまろ）が国司であ

った746年から749年の間に行われたと推察される。

749年に石川朝臣名人(いしかわあそんひと)が上総国司に着任すると、瓦葺を備えた本格的な国分寺の造営が始まったと思われる(名人は、6年間上総国司として在任)。この本格的な伽藍造営期をB期と呼んでいる。もともと石川朝臣氏は、建築等に長けた工官氏族であり、名人自身も造宮卿のキャリアを持つ人物であったことを考えると、上総国司への異動の狙いが国分寺造営の推進にあったとも考えられる。

また、名人が着任する直前の747年に「国分寺造営督促の詔」が発せられており、在地郡司への協力要請がし易い状況であったと思われる。

2. 5 在地郡司の関与について

国分僧寺や尼寺の遺跡から出土した墨書土器や祇園原瓦窯跡から発掘された文字瓦等から在地郡司が国分寺造営に関わっていたことが推察される。

主な事例は、「畔」=畔蒜(あびる)郡、「小川」=畔蒜郡小河郷、「天羽」=天羽(あまは)郡、「岡山」=山辺郡岡山郷、「海上厨」=海上郡、「馬」=海上郡馬野郷、「周」=周淮(すえ)郡

等である。

特に海上郡に関わる墨書土器や文字瓦から、海上郡が国分尼寺造営に寄与していた事実がうかがえる。

2. 5. 国分尼寺遺跡の墨書土器「海上厨」と上総国の郡の配置



引用：l'Museum

2. 6 上総国分寺の完成

上総国分寺の完成時期の記録はないが、おそらく聖武太上天皇の一周忌法要（757年）頃までに主要伽藍が完成したと思われる。

2. 6. 1 国分僧寺

寺域面積は約13万9千平方メートルにおよび、武蔵・下野の国分寺に次ぐ最大級の大きさである。大和の大官大寺をモデルとし、推定高さ63mの七重塔をはじめ、金堂、講堂、回廊を備えた本格的な大規模伽藍であった。

2. 6. 1-1 国分僧寺図



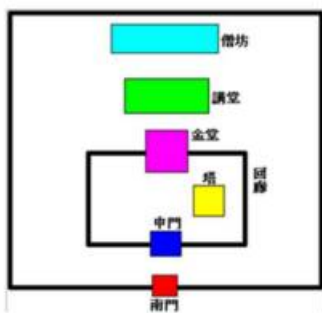
(引用)

地図：l'Museum

絵図：千葉県立中央博物館

(参考) 大官大寺

2. 6. 1-2 大官大寺



藤原京の大官大寺は、飛鳥時代最大級の官寺で、東西約205m、南北約354mの寺域を誇り、9重塔の高さは100mあったとされている。のちに平城京へ移転された。

| | 上総国分寺 | 大官大寺 | 興福寺 |
|-------|-------|------|-------|
| 構成 | 七重 | 九重 | 五重 |
| 高さ | 63m | 100m | 51m |
| 初重の一辺 | 36尺 | 55尺 | 29.2尺 |

2. 6. 2 国分尼寺

寺域面積は約12万3千平方メートルにおよび、尼寺総本山の法華寺に匹敵する。尼寺としては国内最大級を誇る。

■ 「ここまでわかった市原の遺跡 2 上総国分僧寺展 5」市原歴史博物館 (2022/4/18)

<https://www.imuseum.jp/maibun/event/1/701.html>

■ 須田 勉、河野 一也「古代東国の国分寺瓦窯」 (2019/5/25)

第3章 上総国分寺の瓦

本章では、最初に上総国分寺の創建に使われた瓦の総数を推定し、そのボリューム把握を試みる。その上で、創建時の瓦文様について確認し、併せて、その文様のルーツについても考察したい。

3. 1 上総国分寺に使われた瓦の数

国分僧寺と尼寺の創建時に使われた瓦の総数について調べたが、記載するものはなく、現状は不明のため、下記手がかりを基におよその総数を推定してみた（以下はあくまでも小職の勝手な推定値である）。

推定総数：50万枚

総重量：約2,000トン

3. 1 瓦の総数・総重量の推定に用いた情報と計算プロセス

1) 七重塔の瓦数

- ① 七重塔に使われた瓦数は、「史跡 上総国分寺跡」（財）市原市文化財センターによれば、「10万枚近い各種の瓦が葺かれていたと推定されます」との記述あり。
 - ② 現在修復中の興福寺の五重塔に60,000枚の瓦が使われることを基に、興福寺と国分僧寺の塔の高さ、初重の一边幅を比較し、七重塔の瓦枚数を91,000枚と推測した。
- ①と②の情報から、七重塔の瓦数を、90,000枚と推定した。

2) 塔以外の主要建屋の瓦数

上総国分尼寺跡の復元回廊では、中門も含め、50,365枚の瓦を使用した。
国分僧寺・尼寺の伽藍配置図を拡大し、瓦を葺いたとされる主要建屋の面積を測定した結果、塔を除いた主要建屋の総面積は、尼寺回廊のおよそ8倍になったので、塔以外の建屋の瓦数は、 $50,365 \times 8 = 402,920$ 枚となる。

3) 総数

総数 492,920枚 (90,000+402,920)
およそ50万枚の瓦が使われたと推定する。

4) 総重量

瓦一枚当たりの平均重量は、国分尼寺復元回廊の瓦総重量が200tであったので、 $200,000\text{kg} / 50,365 \text{枚} = 3,97\text{kg/枚}$ ⇒ 平均4.0kg/枚と想定した。
よって、創建時に使われた瓦の総重量は、 $500,000 \text{枚} \times 4.0\text{kg/枚} = 2,000,000\text{kg}$
およそ2,000tと推定する。

以上のように、上総国分寺創建にあたっては、大量の瓦が生産されたことは明らかであり、原料の粘土採取から焼成まで手作業で行い、生産後、重い瓦を国分寺まで運ぶ作業はさぞや

大変であったと想像される。

3. 2 上総国分寺の創建瓦文様

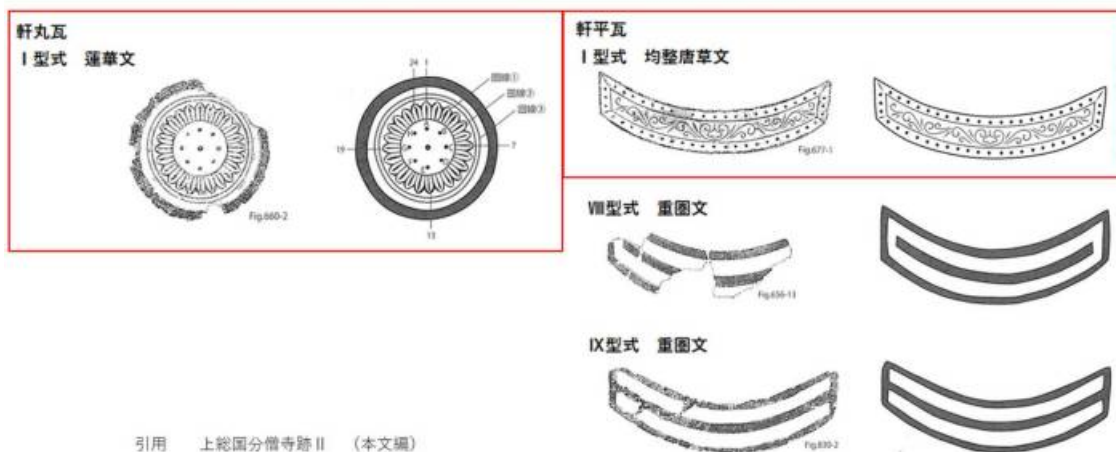
上総国分僧寺跡からは、合計約 100 トン、コンテナ 10,000 箱に及ぶ膨大な量の瓦が出土した。前項で推定した創建瓦のほんの一部ではあるが、膨大な整理分析作業の結果、国分寺創建時に使われた瓦の文様や范とそのルーツ、更に焼成した瓦窯まで分かってきている。

3. 2. 1 国分僧寺の創建瓦

上総国分僧寺の七重塔や金堂などの主要伽藍の軒先を飾った瓦の文様は、軒丸瓦 I 型式、軒平瓦 I 型式、軒平瓦 VIII 型式、軒平瓦 IX 型式の 4 つである。

このうち、軒丸瓦 I 型式（二十四葉単弁蓮華文軒丸瓦）と軒平瓦 I 型式（均整唐草文軒平瓦）は、上総国分寺創建にあたって新たに導入された文様で、平城京の第二次大極殿院に使われた文様の流れをくんでいる。創建時の主要伽藍は、この両文様をセットにして軒先を飾っていた。上総国は古くからヤマト王権とのつながりが深く、こうした瓦文様からも朝廷との関係性が伺える。

3. 2. 1-1 国分僧寺創建時の軒先瓦文様：軒丸瓦 I 型式、軒平瓦 I 型式、軒平瓦 VIII 型式、軒平瓦 IX 型式



3. 2. 1-2 平城宮の瓦文様



一方、軒平瓦Ⅷ型式、軒平瓦Ⅸ型式は、いずれも重圏文の軒平瓦で、創建時には少量が補充的に使われたと思われる。重圏文は、聖武天皇即位後の難波宮の造営に際して初めて採用された文様で、上総国には国分寺創建前から武士廃寺や光善寺廃寺などで使われたようである。そして、その一部が国分寺に転用されたものと思われる。

3. 2. 1-3 難波宮の軒先瓦と復元イメージ



(引用) 旧大阪市文化財協会

3. 2. 2 国分尼寺の創建瓦

上総国分尼寺の主要伽藍の軒先を飾った瓦の文様は、軒丸瓦Ⅰ型式A種(二重圏文)、軒丸瓦Ⅱ型式(蓮華文)、軒平瓦Ⅰ型式(重圏文)、軒平瓦Ⅱ型式(唐草文)の4つである。

このうち、主流に使われたのは、軒丸瓦Ⅱ型式(二十四葉単弁蓮華文軒丸瓦)と軒平瓦Ⅱ型式(均整唐草文軒平瓦)で、国分僧寺と共通の型(範)で製作されたものである。

3. 2. 2-1 軒丸瓦Ⅱ型式(蓮華文)と軒平瓦Ⅱ型式(唐草文)



軒丸瓦Ⅱ型式(蓮華文)
&
軒平瓦Ⅱ型式(唐草文)

出土場所: 上総国分尼寺跡

一方、軒丸瓦Ⅰ型式A種(二重圏文)と軒平瓦Ⅰ型式(重圏文)は、国分僧寺同様補充的に使われたものと思われる。

3. 2. 2-2 軒丸瓦Ⅰ型式A種（二重圏文）、軒平瓦Ⅰ型式（重圏文）



上総国分尼寺跡出土重圏紋軒先瓦

軒丸瓦Ⅰ型式A種（二重圏文）



軒平瓦Ⅰ型式（重圏文）

この二重圏紋軒先瓦は、同文様の瓦が武士廃寺などから出土していることから、国分寺造営以前に使われていた瓦を転用したものと思われる。

2. 4 まとめ

上総国分寺の創建時には、新たに採用した二十四葉単弁蓮華文軒丸瓦と均整唐草文軒平瓦をセットにして主要伽藍の軒先を飾ったものと思われるが、二十四葉単弁蓮華文軒丸瓦の范は創建後失われたようで、補修用としては複数の重圏文や宝相華文（空想上の華麗な花の文様）が採用されている。

2. 4 宝相華文軒丸瓦例



下総国分寺の軒丸瓦

一方、均整唐草文軒平瓦の范は創建後も使われ続けたが、補修や取り換えにあたっては、様々な文様が追加採用されている。また、平瓦の凹面や凸面に、「海上」「馬」「畔」などの文字が記されたものもあり、これらは海上郡や畔蒜（あびる）郡が瓦の供給に携わっていたことを表している。

<参考文献・資料>

■「上総国分僧寺跡Ⅱ」（本文編2）市原市教育委員会（2016/3/18）

- 「史跡 上総国分寺跡 ― 国分僧尼寺とその時代」 (財)市原市文化財センター (1986/3/31)
- 「ここまでわかった市原の遺跡2 上総国分僧寺展5」市原歴史博物館 (2022/4/18)
<https://www.imuseum.jp/maibun/event/1/701.html>
- 須田 勉「ならび建つ国分僧寺・尼寺 上総国分寺」 新泉社 (2220/9/20)
- 「瓦の基礎知識」(株)鶴弥 <https://hitotsuchi.media/tile-history/>
- 「発掘いちはらの遺跡」市原市埋蔵文化財調査センター (2010/3/3)

第4章 古代瓦の製造方法と瓦窯

本章では、まず、古代瓦の製造方法について確認した上で、上総国分寺に使われた瓦を焼いた瓦窯について、所在地や窯の仕様・規模を確認するとともに、瓦の輸送ルートや手段についても考察する。そして、調査結果に基づき、瓦窯マップを作成する。

4. 1 古代瓦の製造方法

古代瓦の製造工程は、基本的に、粘土の混練⇒成形⇒乾燥⇒焼成であるが、特に成形方法については、瓦の種類や形状によって方法が異なる。

4. 1. 1 平瓦の製造方法

平瓦の成型方法としては、当初、百済から伝わった桶型を使用する「桶巻（おけま）き作り」が主流であった。

4. 1. 1-1 桶巻き作り



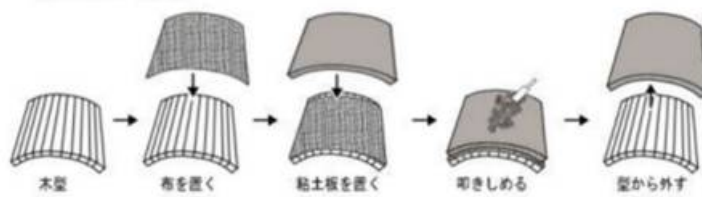
(引用) さいたま市与野郷土資料館展示web解説

桶巻き作りは、4枚の平瓦を一度に作れる技法であるが、逆に4枚分の重い粘土を取り扱う作業には熟練を要したため、大量生産には不向きであった。

7世紀中頃になると、かまぼこ型の成形台を用いる簡便で生産性の良い「一枚作り」が平城京で採用され、国分寺造営とともに地方へ広がっていった。

上総国分寺の平瓦も「一枚作り」技法によるとされている。

4. 1. 1-2 一枚作り



(引用) 「都城の造営と造瓦」 両槻会事務局

4. 1. 2 丸瓦の製造方法

丸瓦は、桶巻き作りを用い、円筒形の木型に粘土を巻き付け、叩き締めて成形した。

4. 1. 2 丸瓦の作り方



(引用) 「伝統瓦の調査と施工について」 竹村瓦商会

4. 2 瓦窯

瓦窯は、大きく「登窯」と「平窯」に分けられ、7世紀までは登窯が使われていたが、瓦の需要増を背景に、より生産効率の良い平窯が広がっていった。

「登り窯」は、須恵器窯の系譜に連なる地下式の「窖（あな）窯」で、斜面地の高低差を利用して、低い部分に「焚口」、中程に「焼成室」（製品の瓦を納める部分）、最上部に「煙道」を配置している。

「平窯」は、緩やかな傾斜面や平坦な地面に穴を掘って作られており、「焼成室」の床面が平坦になっているものと「ロストル」（畦）を設けて火の通りを良くし、製品の焼きムラを改善した「ロストル式」（有畦式）がある（瓦の大量生産に向いている）。

4. 2. 1 川焼瓦窯跡の写真

2025年9月13日高橋撮影

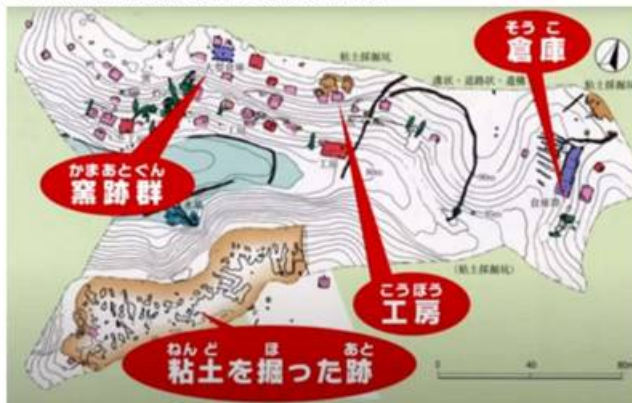


4. 2. 2 南河原坂瓦窯

南河原坂瓦窯は、千葉市のあすみが丘に隣接する丘陵地帯にあり、また、村田川最上流域にあたる。古墳時代から各種の土器を焼いた窯群があり、多数の登窯と瓦専用のロストル式平窯6基が確認されている。

近くの小食土（やさしど）廃寺の瓦はもちろん、村田川の水流を利用して国分僧寺と尼寺に創建瓦や補修瓦を供給した。

4. 2. 2 南河原坂窯跡群配置図と出土瓦



(引用) 千葉市埋蔵文化財調査センター



2026年3月25日高橋撮影

4. 2. 3 神門（ごうど）瓦窯

国分僧寺跡南西隅の西方100mの台地西斜面に位置しており、昭和49年の確認調査により、5基の登窯があったことが確認されている。

文献によって、上総国分寺の創建瓦を焼いたという説と創建以降の補修瓦を供給したとの両説がある。

4. 2. 4 南田瓦窯

国分僧寺跡の南側斜面に位置しており、平安時代に国分僧寺の補修瓦を焼いたとされ、4基のロストル式平窯が確認されている。

4. 2. 4 南田瓦窯

2025年11月12日高橋撮影



I'MuseumのHPより



4. 2. 5 祇園原瓦窯

国分尼寺寺院地南西隅の西方約80mの大地南傾斜面にあり、平安時代に国分尼寺の補修瓦を焼いた瓦窯である。窯は平窯と推察されるが、損傷が進んでいたため、詳しい構造は不明。

しかし、窯跡から文字瓦が発見されており、「海上」や「馬」の文字を凸面に印刻した平瓦の他、凹面に白泥で「畔」と書いた平瓦などがある。これらは古代の海上郡馬野郷、畔蒜（あびる）郡を指すものであり、これらの郡が国分尼寺の補修に係わっていたことを示している。

4. 3 まとめ

上総国分寺に使われた瓦の量は膨大で、製造した瓦窯群は5つあった。最初は村田川流域の瓦窯（川焼、南河原坂）から運んでいたが、やがて、国分寺の近郊に瓦窯（神門、南田、

祇園原) を設けて焼いたと推察する。

瓦の原料の粘土については、一般的に良い粘土が採れる場所に窯を設置するようであり、南河原坂や南田でも瓦窯の近くに粘土の採取跡が確認されている。

4. 3 瓦窯マップ



<参考文献・資料>

- 須田 勉 「ならび建つ国分僧寺・尼寺 上総国分寺」 新泉社 (2220/9/20)
- 「史跡 上総国分寺跡 — 国分僧尼寺とその時代」 (財) 市原市文化財センター (1986/3/31)
- 「上総国分僧寺跡Ⅱ (本文編2) 市原市埋蔵文化財調査センター
- 「ここまでわかった市原の遺跡2 上総国分僧寺展5」 (2022/4/18) 市原歴史博物館
<https://www.imuseum.jp/maibun/event/1/701.html>
- 須田 勉、河野 一也 「古代東国の国分寺瓦窯」 (2019/5/25)
- 山下 亮介 「南河原坂窯跡—あすみが丘にあった窯業のむら」 千葉市埋蔵文化財調査センター [file:///C:/Users/uq026/Downloads/%E5%B1%B1%E4%B8%8B%E8%B3%87%E6%96%99%20\(10\).pdf](file:///C:/Users/uq026/Downloads/%E5%B1%B1%E4%B8%8B%E8%B3%87%E6%96%99%20(10).pdf)

あとがき

現在、奈良の興福寺の五重塔の修理工事が行われている。本五重塔は、室町時代に再建されたもので、今回約6万枚の屋根瓦の吹き替えが予定されている。中には、室町当時の瓦も含まれており、600年たった今も使われ続けている。



(引用) 奈良新聞デジタル



(引用) 関西TV

上総国分寺は、国分寺建立の詔から十数年の歳月を費やし、756年頃に瓦葺の荘厳な伽藍が完成した。しかし、およそ100年後には複数の建物が焼失したとされている。復興にあたって、七重塔は断念され、復旧伽藍は掘立柱建物となり、瓦葺は採用されなかった。

本来は数百年も長持ちする瓦が、たった100年で大半が失われ、捨てられたてしまったことは残念である。

本論文は、いちほら市民大学の歴史文化リエゾンコース履修中に作成したものを加筆・編集したものである。